

淡路昆虫研究会 15 年に思う

奥 谷 禎 一

淡路昆虫研究会が同好会として発足してから、もう15年になるとは、月日の立つ早さをひしひしと感じる。10周年にもお祝い申上げたが、ここまで成長した研究会に対し、蔭になり努力された方々に対し、本当に心から敬意を表したい。

昆虫学の進歩は、多くの昆虫愛好者の観察や採集記録によって進歩してきている。特に近年の環境破壊は、昆虫類の減少としてとらえることができるが、自然系の博物館の発達していないわが国では、各地の採集目録に頼らなければならない現状である。この意味において、採集目録はたいへん重要である。昭和53年度に環境庁が実施した「第2回自然環境保全基礎調査」の動物の部で、私は昆虫類の調査について、全国のまとめをやり、色々な問題点がわかったので、今後の皆様の調査に役立てばと思ひ、思いつく2、3の点を記してみた。

調査の概要は御存じの方が多と思うが、全国的に調査を行うもの10種(ムカシトンボ、ムカシヤンマ、ハッチョウトンボ、ガロアムシ目、タガメ、ハルゼミ、ギフチョウ、ヒメギフチョウ、オオムラサキ、ゲンジボタル)を指標昆虫とし、各県で選定した50~100種の特定昆虫とに分け一定の様式による調査票に記入された。特定昆虫の選定基準は、A、わが国ではその地域にしか産しない種、B、分布域が限定されている種、C、分布の限界にある種、D、その地域で絶滅の危機にある種、E、絶滅したと考えられる種、F、乱獲などにより激滅した種、G、環境指標として利用できる種の7つの分類により、分布地、現状などが記録された。

指標昆虫では、同定はあまり心配されずにすんだが、特定昆虫にはかなりあやしい種が所々に見られた。指標昆虫では、タガメ、ハルゼミ、ゲンジボタルの3種では、あまりにも普通種にすぎ、調査者の近傍しかわからず各県ともに大いに困った。兵庫県では、幸に比較的情報を集めたので、ましではあったが、数県ではタガメに関する情報が得られないまま、「絶滅した?」と報告され、新聞紙上でさんざんな目に会わされたことは諸兄も気づかれたかと思う。淡路ではタガメの情報とはれず、現在では確実な生息地は不明である。また、ハルゼミは都市周辺では減少しているようであるが、これも普通種で記録がなく、かなり実情よりも少なく報告されているようであった。特定昆虫は兵庫県では85種を選定した。このうち淡路に関係のある種は登日氏と相談して次の種を選んだ。本土に記録がなく、恐らく淡路にだけ分布のあるもの、:クチキコログ、アシジマカネタタキ、クロスジユミモンクチバ、ハマオモトヨトウ、マイコトラガ、の5種、本土にも記録があるが淡路にも産するもの、:ハネビロエゾトンボ、オオエゾトンボ、マダラニワトンボ、アオマツムシ、タイワンカンタン(別名、ハネビロカンタン)、ヒメハルゼミ、

ナガサキアゲハ、ヒロオビミドリシジミ、ヨドシロヘリハンミョウ、アキオサムシ、オオヒョウタンゴミムシ、キョウトアオハナムグリ、タカサゴシロカミキリの13種、このうちキョウトアオハナムグリの記録は淡路としかなく、地点は不明である。また、環境保全基礎調査という観点からはアオマツムシは不適當な種と考えられる。

さて、このようにして得られた情報は、国土地理院発行の $1/20$ 万地勢図に産地がプロットされ、調査票と共に環境庁に提出され、調査概要は「日本の重要な昆虫類」として、分布図は「動植物分布図」として市販された。

所で、この分布図の作成に当り非常に困ったのは、調査票に記入があっても $1/20$ 万の地図への記入もれがあった際、地域名が俗称でかかかれているため、 $1/5$ 万や $1/2.5$ 万の地図に現れない地点があることであった。また、この情報をコンピューターに入力するにも非常な不便を感じた次第である。従って、次回以降の調査には、メッシュ法により行われることになる。メッシュの広さは、大動物と異なり約 1 Km^2 で行われることになると思われる。約 1 Km^2 のメッシュとは経度45秒、緯度30秒で切ったとき、すなわち $1/2.5$ 万地図の縦横をそれぞれ10等分して、1枚で100のメッシュをつくったときにできる1区画が約 1 Km^2 となるわけである。この方法は、政府の行う各種の国土情報データの基となるものであるので、これからの分布情報には、この基準によることが便利かと思う。幸に $1/2.5$ 万の地図には、それぞれ地名が付せられているので、 $1/100$ に切ったメッシュを東北の隅を1とし、南へ2、3・・・10とし、次の縦を11～20というように決めておくと、採集地「洲本100」といえば直ちに地図で読み取ることができ、たとえ地名のない山中でもかなり正確に表わすことができることになる。このようにして分布地を示せば、県境や市境などの人為的に分けられた境界線を意識しなくてすむし、将来データ・ベースとして利用価値もあがることになる。現在、神戸大学で進められている「瀬戸内海自然科学データ・ベース」もこの方法で、各メッシュに一連番号（内閣で統一されたものがある）を付し、それにデータを記憶させておく予定となっている。もちろん、このデータ・ベースには淡路の昆虫分布についても、諸兄らの記録により入れてゆく予定である。

折角15年も続いた淡路昆虫研究会であるので、この辺で発想の転換をして、将来にわたり、データ・ベースとして利用できるような分布資料をつくって行かれることを考えてはと思い、あえて駄辯をつづった次第である。

（神戸大学教授）